



夏見台幼稚園・保育園 ニュースレター 2024.5.25 号

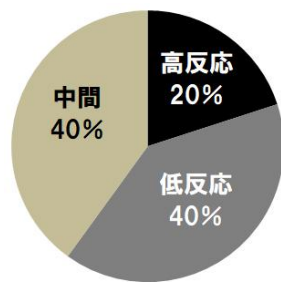
夏見台幼稚園・保育園でのこ
わりをニュースレターにまとめます。どうぞご覧ください。
※配信停止の方はメールでどうぞ(info@treponte.jp まで)

〒273-0866 船橋市夏見台 2-16-1 夏見台幼保園

赤ちゃんを45分間観察するとわかること

赤ちゃんを 45 分間観察すると、その子が将来、
内向型の人間になるか外向型かわかるといいま
す。ハーバード大学のジェローム・ケーガンは、
研究所に 500 名の生後 4 か月の乳児を集めまし
た。1989 年のことです。

赤ちゃんに新しい体
験をさせます。色鮮や
かなおもちゃを見せる、
先端をアルコールに浸
した綿棒を鼻先へ持っていく…そのときの反応
を記録すると、次のような円グラフになりました。



元気よく泣いて手足を
ばたつかせた高反応の子
ども：20%、静かで落
ち着いたまま、さほどの
リアクションもない子ど
も：40%、その中間が
40%です。

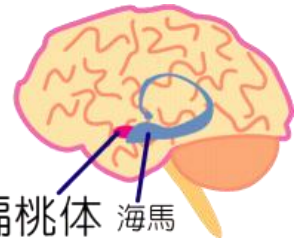
その後、2歳、4歳、7歳、11歳と観察を続け、
20歳前には脳の内部を fMRI という医療機器で
分析もしました。その結果わかったことは…

高反応の赤ちゃんの多くは、思慮深く慎重な
性格に育ちました。反対に、低反応の赤ちゃん
は、おおらかで自信家に育っている例が多くみ
られました。つまり…

生後 4 か月で高反応＝内向型に育つ
生後 4 か月で低反応＝外向型に育つ

ということです。

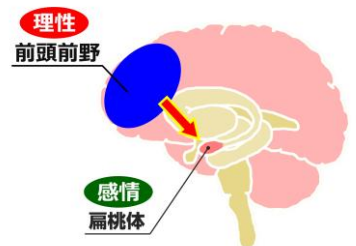
脳科学的に推測される
ことは、内向型の子ども
は扁桃体（へんとうたい）
の過剰反応があるとい
うことです。扁桃体



とは、記憶に関わる海馬（かいば）のすぐそば
にある、「感情の記憶」をため込む部位です。
感情的な人はこの扁桃体が過敏になっていると
いわれます。刺激に対し興奮しやすいのです。

こうした子どもは、自分が気づいたことを深く
考えたり、感じたりします。あらゆる日常的
な体験から微妙なニュアンスを感じとろうとし
ます。ほかの子のおもちゃをうっかり壊してし
まうと、罪の意識と悲しみをより強く感じてしま
います。

刺激に敏感なだけに、成長するにしたがって
慎重になっていきます。集団のようすを、ひと
り遠くから観察
している子ども
のように。では
このようなとき
に脳内では何が
起こっているの
でしょうか？



私たちが自分を落ち着かせようとしていると
きの脳内の様子がわかってきました。理性をつ
かさどる「前頭前皮質」の働きが活性化すると
ともに、扁桃体の活動が低下するのです。

高反応な子どもたちは、興奮しやすい扁桃体
をつねに制御しているのです。だから何か新し
いストレスが加わると、前頭前皮質はその対応
に手いっぱいとなり、お
となしくしていた扁桃体
が騒ぎだすのです。

以上のことは、スーザ
ン・ケイン著『内向型人間
の時代』に書かれています。
アメリカには外向的な性
格がよいという価値観が



あります。しかしそんなアメリカ人でさえ、その 1/3 か 1/2 は内向的な人間であると書かれています。

社会的な評価はいまいちな内向性ですが、創造性においてもビジネスにおいても、成果を上げていることが紹介されています。

【創造性】

1956 年から 1962 年にかけて行われたカリフォルニア州立大学バークレー校の調査。建築家、科学者、数学者、エンジニア、作家など各方面で活躍した人は内向型とわかった。

【ビジネス】

1) 今や古典的な経営書となった『ビジョナリー・カンパニー』の著者ジム・コリンズは、優良企業 11 社の CEO（最高経営責任者）の共通点を、その内向的な性格と指摘した。慎重なので部下の意見によく耳を傾ける。能動的で有能な部下にとって働きやすい。

2) ハーバード・ビジネススクールが行ったアメリカの 5 大ピザ・チェーン店の売上げ分析。

- ・外向型の店長 →
部下が受動的だと売上アップ
- ・内向型の店長 →
部下が能動的だと売上アップ

こうして考えると、スタッフ個々の能動性が求められる現代社会では、内向型のリーダーシップの重要性は今後ますます高まりそうです。

しかしここに大きな問題があります。教育です。アメリカの小学校の教師たちが言います。

「学校でのグループ学習は、大企業に牛耳られるアメリカ社会のチーム文化の中で自己主張する練習の場になっている」

「ビジネス社会では独創性や洞察力よりも言語能力が評価されます。子どもたちは学校でもそれに慣れねばならないのです」

日本の新しい指導要領も、「主体的で対話的な学習」をスローガンに変わろうとしています。グループ学習の機会も増えています。それ自体はいいことです。

しかし私が考える大きな問題は、「**主体性＝外向型**」というステレオタイプの発想です。内向型にだって主体性があります。ひとりで黙々と課題に取り込む、粘り強い主体性が。

もちろんコミュニケーション能力は大事です。磨かねばなりません。ただ「外向的にふるまえない自分はダメなんだ」という学習性無力感にだけは陥ってほしくないと私は願います。

本の最後には、内向型の子どもを育てるにあたってのアドバイスが書かれています。以下いくつかをまとめます。

- ・自信を失わないようによくコミュニケーションをとる：「それはお前のスタイルだよ。お前はじっくり時間をかけて確実にやるのが好きなんだよ」
- ・新しい体験への対応を助けてやる。
- ・親がモデルになり、初対面の人と穏やかに親しげに挨拶する様子などを見せる。
- ・年下の子どもと遊んで自信をつけたり、年上の子と遊んで刺激を受ける（まさに異年齢保育ですね）。
- ・親がよくやるようなやけに明るい笑顔で「学校は楽しかった？」と聞くことを避ける。学校で何があったかを親に打ち明けるかどうかにすべてがかかっている。子どもに質問するときはやさしく中立的な立場で。

クラスの人気者である必要はないわけで、成長すれば持ち前の粘り強さと観察力で、しっかりとした技能を身につけるはずだとスーザン・ケインはいいます。結局、自己肯定感を育むことが要だなと思いました。

（終）